

大毛池田遺跡出土の土師器皿について

—— 94 J 区出土遺物の検討 ——

北條真木

はじめに

愛知県一宮市に所在する大毛池田遺跡は、昨年すでに報告されているとおり、古墳時代前期～戦国期に至る複合遺跡である。なかでも下層遺構面で確認された古墳時代の水田遺構は、濃尾平野沖積地における貴重な検出例として注目されている。

これまで大毛池田遺跡の中世以降の時期については資料に乏しく、大半が不明のままであったが、平成6年度さらに東側の区域を調査したところ、比較的大きな規模をもつ屋敷地跡と思われる一角が確認された。主な遺構としては、屋敷地を区画すると思われる複数の溝が検出され、うち1条は方形にめぐるとすれば、一辺100m前後の区画を形成するものと推定される。他の地域の事例からしても国人領主クラスの有力者の居館であった可能性は高く、資料的にも重要な発見となった。

遺物は、土器・陶磁器類を中心にこの方形区画溝（以下居館大溝）とその周辺の遺構からまとまって出土しており、器種や出土量などの分布の状況にも特徴がみられる。これらを詳細に検証することによって、屋敷地の具体的な内部構成やその変遷を追うことも可能かと考える。調査は継続中であり、ようやく一部整理を始めた段階ではあるが、本稿ではとりあえず特徴的な分布がみられた所謂「かわらけ」、土師器皿をとりあげ、屋敷地との関連を報告したい。

1

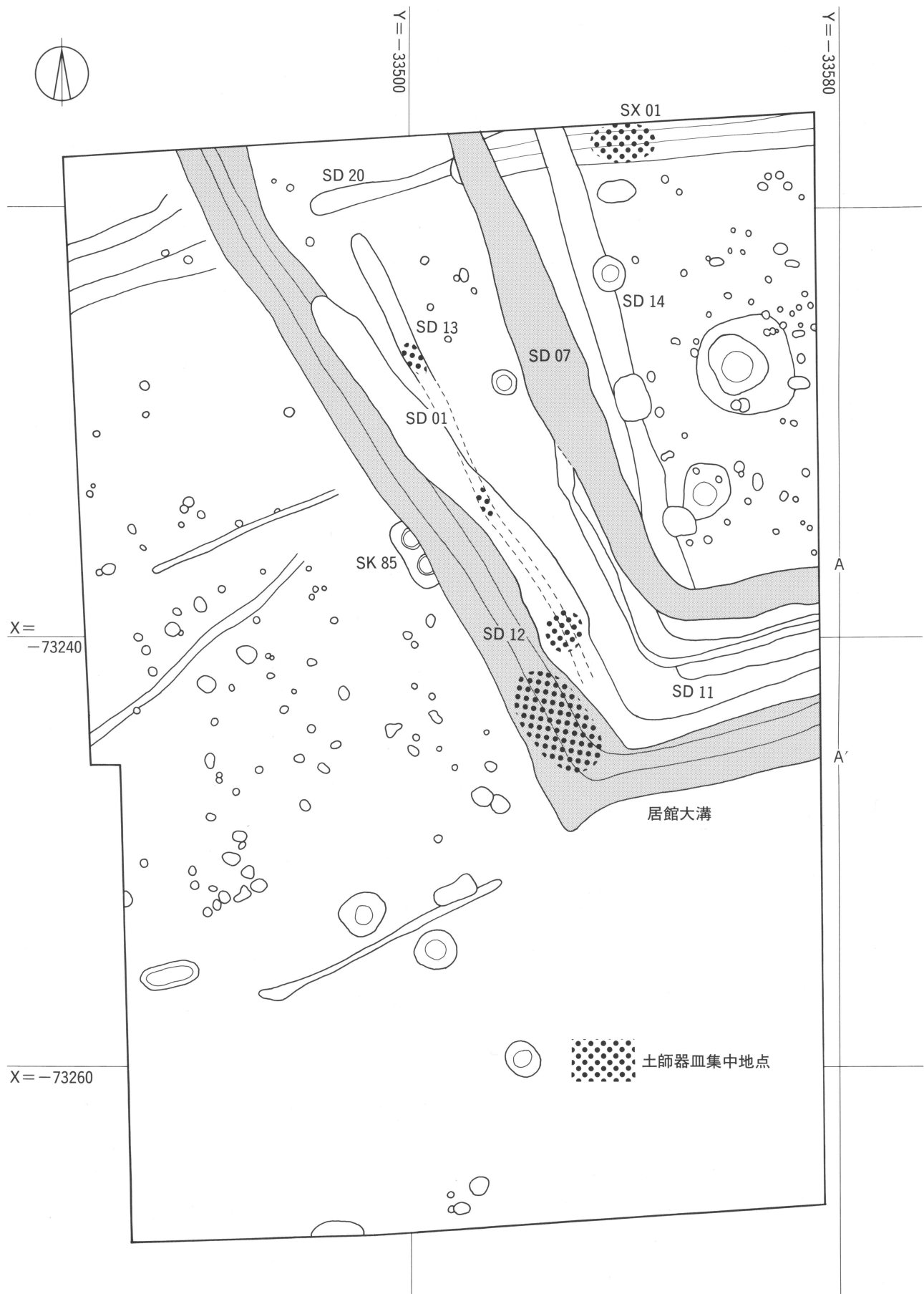
資料は、94 J 区の北東部分に展開する区画溝を中心に抽出した。ここは想定される屋敷地区画の南西のコーナー付近にあたり、現状では最も出土遺物の多い一角である。居館大溝の内側に相当す

る部分では、井戸・土坑のほか、近接した位置でL字に折れ曲がる溝が重複して確認されており、区画溝は繰り返し修復されながら一定期間機能し続けていたことを示している。これらの溝について前後関係が分かるものは、(S X 01→) S D 14→S D 07 / S D 13→S D 01 / S D 12→S D 01 [第2図] である。ただし、S X 01は溝のほか複数の土坑の出土遺物も含むため検討には十分注意したい。

なお土師器皿の基本的な分類([] 内) については、佐藤論文及び北村報告に従った。

S X 01

調査区北端にかかり、遺構の正確な形状は不明であるが、深さは1.6mを測り遺物の全体量は比較的多い。含まれる灰釉系陶器は尾張型が半数以上を占め、古瀬戸陶器類はほとんど含まない。皿は灰釉系陶器の完形品と土師器がセットで出土する。特に土師器皿については、復元不可能な細片がコンテナ1箱分に及び、他の遺構ではみられない特異な様相を示している。土師器皿は非ロクロ成形の3タイプがみられる。7は口径13cm、器高3.0cmで褐色を呈する。口縁端部は丸味をもち、周囲に強い横ナデが施される。体部から底部にかけては無調整で指の圧痕による凹凸が著しい[B₁類]。8、9は底部が丸味を帯び、口縁が内弯する。口径12.5～13cm、器高3.0～3.5cmとやや深い[B₅類]。調整は上記のものと同じで8は灰褐色、9はピンク系白色を呈する。1～6は口径8.5～8.0cm、器高1.2～1.8cmの小型のもので、内面見込み部分ヨコナデのあと外周に沿ったナデを施す。外面のナデも明瞭で、ハケ状の工具を用いたものや口縁端部にわずかに面をもつものがみられる。胎土は密で灰褐色を呈する[B₃類]。



第 I 図 94 J 区主要遺構配置図 (1 : 250)

SD11

居館大溝の区画内側にあり、大溝南辺に並行して延びる幅0.7m深さ0.5mの溝で、数点の土師器皿のほか灰釉系陶器碗（山茶碗17～19）は尾張型・東濃型の両者を含む。土師器皿16は非ロクロ成形の小型の皿であり、内面と外面口縁部付近にナデが施され、外面底部にかけて指による凹凸がみられる。口径8.8cm、器高1.4cmで、胎土はやや粗く、明褐色を呈す〔B₃類〕。

SD13

居館大溝の西辺に沿って延びる幅0.5m、深さ20cmの溝で、一部はSD01に切られている。灰釉系陶器類では東濃型の均質な胎土をもつ碗・皿が多くみられる。その他に少量であるが伊勢型鍋や土鍾などを含む。土師器皿は2タイプがあり、比較的まとまって出土した。20～25は口径9.2～8.4cm、器高1.6～1.9cm〔B₃類〕。SX01の小型の皿と比較すると体部と底部の境が不明瞭で、外面のナデも強くない。26、27は丸底の皿で、口径12cm前後、器高2.6～3.3cmを測る〔B₅類〕。ピンク系の白色を呈するものが多い。

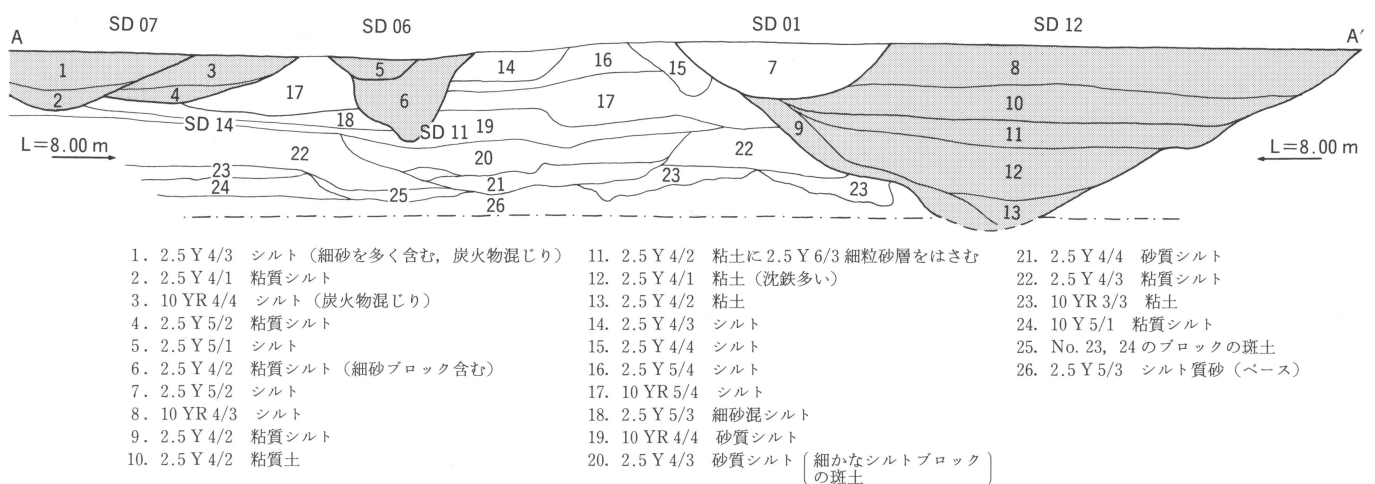
SD07・14

遺物実測図は示していないが、大区画の内側に位置しており、居館大溝の西辺と南辺に沿って内

側の別の区画を構成している。SD07の幅は1.3m、深さ40cmで、遺物は灰釉系陶器をはじめ、大甕片、播鉢、天目碗、内耳鍋などがあり、青磁片、土鍾がやや多い。土師器皿はSD12と同様な非ロクロ成形の小皿を少量含む。SD14は、幅1.3m、深さ30cmで土師器皿はみられない。その他の遺物はSD07とほぼ同じで青磁、土鍾の出土が目を引く。

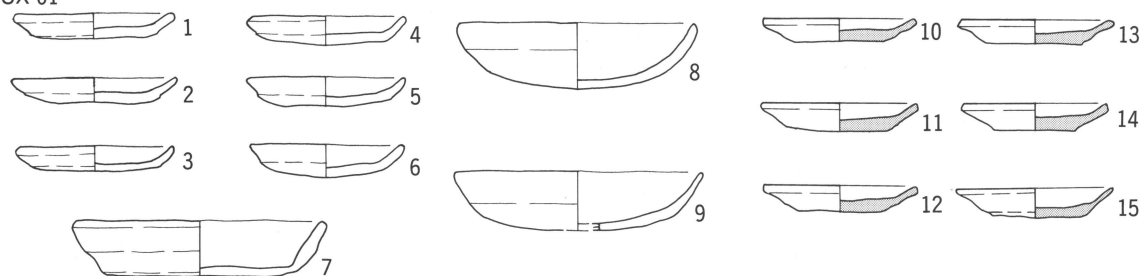
SD12

居館大溝は検出面で幅4.5m、最深1.2mであり、J区南端では断面形態がV字状に近いものが調査区北側で浅いU字状の溝となる。遺物は溝の中位以下の粘質土層から量を増し、器種も多彩である。灰釉系陶器は東濃型の薄い均質手の碗が圧倒し、その他大甕片、播鉢、古瀬戸灰釉碗、四耳壺、天目碗、青磁片、土鍋では内耳鍋などのほか、漆器碗・皿類も出土している。石鍋の破片も数点みられる。土師器皿は非ロクロ成形のもの2タイプとロクロ成形のもの1タイプがみられる。30～37は基本的にはB₃類の小型化したもので、口径6.8～7.5cm、器高は1.2cm前後と偏平な平底の小皿である。出土した土師器皿の中で完形品の数量が最も多く、溝全体に散在する。ただし、コーナー付近に若干の集中がみられる。45は口径12cm、器高2.8cm、外面のナデの幅が大きく体部全体に及ぶ。38～43は、

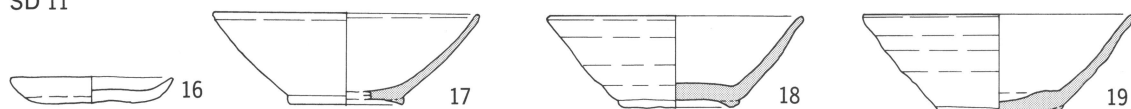


第2図 94 J区東壁土層断面図（1:50）

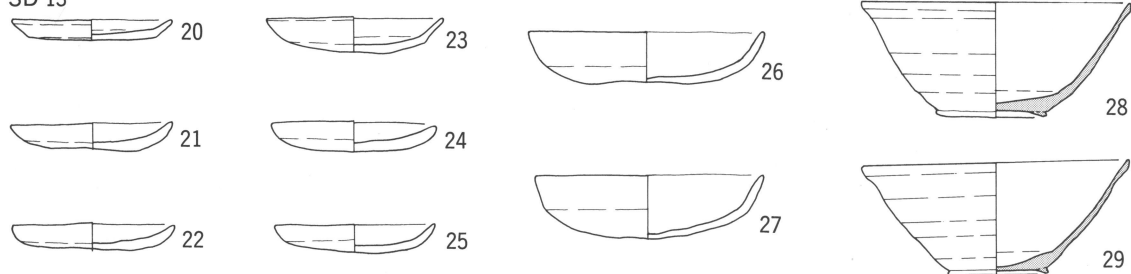
SX 01



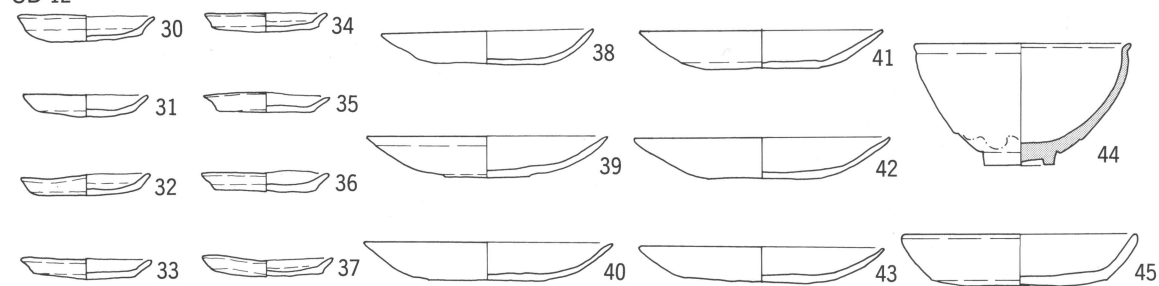
SD 11



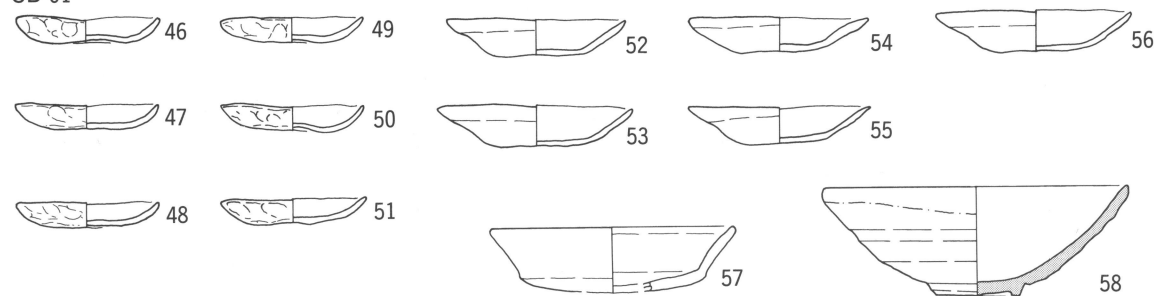
SD 13



SD 12



SD 01



第3図 94J区出土遺物 (1:4)
(アミは灰釉系陶器・施釉陶器)

この調査区では唯一のロクロ成形の大型の皿で、口径13cm、器高20cm前後、底部には糸切りの痕跡が明瞭でF₁類とされるものである。

S D01

居館大溝が廃絶した後、ほぼ同じ位置に掘削された浅い溝で、深さは40cm前後。割石と共にまとまった量の出土遺物があり、これらの大半は区画内側から投棄された状況が窺える。灰釉系陶器(東濃型)を主に青磁、天目碗、古瀬戸灰釉平碗、合子、播鉢、大甕片などがあり、土師器皿は半径30cm程度の範囲内に集中し、表または裏むきで数個体が水平に近い状態で検出された。非ロクロ成形のもの3タイプがあり、46~51は口径7.6cm前後、器高1.0cm前後の小型の皿であり、内側の表面は滑らかであるが外面は無調整、指による圧痕が夥しい。底部は中央部分が若干内側にへこむ。平面形態は正円に近く、ほぼ同一規格であり、内型を用いた制作技法が推定できる。胎土には砂粒を殆ど含まず、白色を呈する。52~56は口径10cm、器高2.0cm前後の中型の皿で、内面は外周に沿ったナデ、外面は口縁部付近のみナデが施され、底部にかけては無調整である。指頭痕、爪形痕がみられ、胎土、色調は小型の皿に同じである。57は1点のみ、口径13cm、器高3.5cm前後であり、軟質でかなり摩滅している。内面は立ち上がり部分は外周に沿ったナデ、外面体部は強いヨコナデが施され、底部との境に稜をもつ。内外面とも灰褐色を呈する。

2

以上に述べてきた各遺構の時期であるが、土師器皿以外の遺物の分析が不十分なため、ここではおおまかな区分を示すにとどめたい。

尾張地域での土師器皿の変遷について、佐藤氏の論考を大まかに要約すると、古代末から続いたロクロ成形の皿(柱状高台をもつもの、或いは高杯などA類)は13世紀以降姿を消し、12世紀後半~

15世紀には手捏ねや型押しなどの非ロクロ成形の皿(B類)が主体となる。再び新たなロクロ成形の皿が出現してくるのは15世紀後半以降であり、これは在地の窯業地の影響、すなわち大窯の出現・成立との関連を指摘されている。

94 J区ではA類は全く見られず、出土した土師器皿は、尾張において非ロクロ成形の皿が主流となつてかわった13世紀代から再びロクロ成形の皿(F類)が出現した15世紀末までのものが含まれていると考えられる。

まずB類のうち大型のB₁類は少量で、浅い平底の小型の皿B₃類が量としてはまとまっている。S X01とS D13には同じ大型の丸底の皿B₅類が含まれているが、B₃類は口径など若干異なり、僅かに時期差が想定できる。S X01は遺構が掘り込まれている層位からすると、廃絶するまでやや幅があると思われるが、少なくともB類₃の皿は共伴する灰釉系陶器から13世紀中頃~末に比定できる。またS D13は同じく灰釉系陶器から13世紀中頃~14世紀初めの時期が想定でき、同様のB₃類土師器はS X01より若干新しいものと位置づけられるのではないだろうか。S D12では、B₃類の皿は法量が更に縮小し、再出現したロクロ成形の皿F₁類が含まれる。陶器類からも15世紀末~16世紀初の窖窯Ⅳ~大窯Ⅰ期の時期に比定できる。遺物の提示がなく検討が不十分であるが、これの内側を区画するS D07は若干古い様相を含むと考えられる。

ところで、S D01出土の土師器皿は胎土も異なり尾張地域ではほとんどみられないものであった。同様なものは、岐阜市長良西後町に所在する城之内遺跡から出土し(「城之内タイプ」といわれるもの)、これらは16世紀前葉代の京都のかわらけのコピーと考えられている。大毛池田遺跡では居館大溝(S D12)の北東コーナー部分を壊して掘削されている土坑(S G01、調査の概要第4図)から天文8年(1539)の紀年銘木簡が出土し、同じく

大溝が埋積した後につくられたS D01に「城之内タイプ」土師器皿がみられることから、ほぼこの時期までに居館大溝が廃絶し、区画溝の規模の縮小をはじめ、居館または周辺の景観が大きく変化していたことが想像される。

3

土師器皿の出土状況に関して現時点での問題点を整理しておきたい。

まず、土師器皿は大半が溝から出土し、土坑や井戸内からはごく少量しか検出されない。しかも溝内に集中する箇所をもち、いずれも短期間に一括して廃棄された状況が窺える。集中する部分のさほど目立たなかったS D12についても、区画溝全体から眺めると、北辺区画と比較してやはり大量廃棄とも呼べる特異な様相を呈している。

このような土師器皿を含む土器の大量廃棄の状況は、中世居館あるいは集落遺跡で数多く検出されている状況と同様であり、これらは非日常的な行事に使用されたとする見方が一般的である。大毛池田遺跡の事例からすぐさま具体的な解釈を示すまでには至らないが、少なくとも屋敷地における非日常的空間の配分のありかたについて多くの示唆を与えてくれるものと考ええる。また、溝ごとに検出されている数次にわたる土器の一括廃棄の状況も、空間自体の変遷とどのような関連をもちながら推移してゆくのか更に詳細に検討する必要がある。

まとめにかえて

以上のことより大毛池田遺跡では、遅くとも13世紀中葉には屋敷地を構成する区画が整備されており、16世紀初めには区画大溝が廃絶するという大まかな状況を窺うことができた。土師器皿の特異な出土状況は、その変化を特に際立たせるものであった。

今回、土師器皿の流通については触れることができなかったが、大毛池田遺跡では居館大溝の廃絶期を境にした流通圏の変化が顕著である。当時の尾張中心部・美濃の中間に位置するという地理的・歴史的な環境、及び基盤となる集落の規模などを考慮しつつ、この点についても今後の課題として追求してゆきたい。

小文を成すにあたって内堀信雄、遠藤才文、小澤一弘、金子健一、佐藤公保、鈴木正貴、樋上昇の各氏には多くのご助言を頂きました。記して謝意を表します。

参考文献

- 佐藤公保 1986,1987 「中世土師器研究ノート(1)(2)」『年報昭和60年度・昭和61年度』
(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 北村和宏 1988 『杉山遺跡』
(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 尾野善裕 1994 「生焼け山茶碗と土師器皿—山茶碗生産地域におけるロクロ成形土師器皿の生産—」考古学フォーラム4
- 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター
- 金子拓男・前川 要編 1994 1993年度日本考古学協会シンポジウム報告集『守護所から戦国城下へ—地方政治都市論の試み—』名著出版
- 山川 均 1994 「土器をまとめてすてること—「中世土器集積」の具体的解釈に関する試み—」『文化財学論集』奈良大学文学部考古学研究室
- 『城之内遺跡—東長良中学校建設に伴う岐阜大学跡地の緊急発掘調査—』1990 岐阜市教育委員会
- 『城之内遺跡—長良高等学校体育館建設に伴う岐阜大学跡地の緊急発掘調査報告書—』1990 岐阜市教育委員会
- 『城之内遺跡II—』1991 岐阜県教育委員会・(財)岐阜県文化財保護センター
- 秋季特別展図録『中世びとのくらしと喜怒哀楽』1994 奈良県橿原考古学研究所附属博物館